
美しい国の姫

まろにー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しい国の姫

【Nコード】

N5670C

【作者名】

まろにー

【あらすじ】

とある美しい国の姫とその養育係とのラブコメ。

（前書き）

舞台は和風異世界です。短いです。おまけに18禁とまではいきませんが微妙にエロが入っています。

とある世界のとある時代、はるか東の果てにある美しい国で……。

絹のように柔らかな月光が、夜露に濡れる少女と男を薄くくるんでいた。

「好きですよ、姫様。ほかの誰よりも何よりもあなたのことが。初めてお会いした日からずっとお慕い申し上げていました」

長身の男は少女の耳元へ、情熱的な告白とともに熱い吐息を吹き込んだ。それだけでぞくりと彼女のきゃしゃな背筋は大きく震える。ああわらわもそなたが好きじゃ、初めて会ったときから好きで好きでたまらなかつたのじゃ。と、あたりもはばかりず叫びたい衝動に少女は駆られた。

だが、自分をがっちり抱きしめている男の熱に吞まれてしまって、彼女はあえぐようにしか声を出せなかった。

どうしてこんなに密着した状態になったのか少女にはさっぱりわからない。でもいつのまにか養育係と自分は御所の露台で抱き合っていて、養育係は当然とばかりに少女の髪や耳に平気で口づけているのである。

普段は小言ばかりで憎たらしいだけの口が、悪戯でじゃれつく犬みたいに少女の耳たぶからさらには首筋にまで何度も噛みついてくる。「あつ」

生暖かい感触に少女は思わずのけぞる。

くすぐったいような心地のいいような不思議な感覚についてうつりしてしまう。すると黒の僧衣がそっと少女からわずかに離れた。

ずっと冷たいすきま風が二人の間に入る。

もう終わりなのか？

びっくりして追いかけようとしたら、突然形のよい指先に白い顎が

くいつと持ち上げられた。

視界に、僧侶のくせに尋常でない色気を放つ男が飛び込んでくる。少女は思わず夜の闇をそのまま切り取ったかのような黒い瞳に吸い込まれそうになった。蝶よ花よと育てられた少女とて、これから男が何をしようとしているのかわからないほどうぶではない。

少女の好きな端正な顔が徐々に近づいてくる。

しかし、苦しいくらい胸が高鳴って目を閉じることではできなかった。今にも唇と唇が触れ合おうとした。そして

「いつまで眠っておられるおつもりですか、姫様？もうすぐ午餐の時間ですよ」

そして、冷や水を浴びせるような厳しい声音が、突然頭上から降ってきた。

あれ？

少女が瞳を瞬くと確かに男はいた。

だが息もできないくらい熱くこちらを見つめているのではなく、心底呆れたように少女を見下ろしているのである。少女の細い腰を抱き寄せていた腕も、今では胸の前で堅くくまれている。

あれ？あれれ？

何度瞳を瞬いてもこの立ち位置は変わりそうにない。

触れあう互いの熱も吐息もまったく感じさせられない距離である。

男が背負っている景色も三日月が輝く夜空ではなく、見慣れた木目の細かい天井だ。

少女は、驚いて跳ね起きるとあたりをぐるっと見回した。

御簾で囲まれた広々とした空間には、よく知っている卓子やふみ机や椅子に茶器、鏡台やその他先祖代々伝わる壺やら掛け軸やら調度品類が整然と並べられている。

そこは勝手しつたる自分の寝室だった。外の世界に続いている露台ではない。おまけに部屋に面した回廊には、明るい日差しがさんざんと降り注いでいた。

「ひよつとしてあれはすべて夢じゃったのか……」

少女は呆然とつぶやいた。

熱い抱擁も、愛の告白も、待ちに待った接吻も全部月の神が戯れに披露した幻だったのだ。そして朝になれば古からの言い伝えどおり幻は日の光にすっかりかき消されてしまった。

少女はうつとりまどろんでいた夜の闇から、日の当たる現実引き戻されて愕然とした。

せつかく、せつかくよいところまでいったというのに。

起きるなり肩を思いつきり落としている少女に、養育係はいぶかしげに眉を寄せた。

「まだ寝ぼけているんですか？とつと顔を洗って歯を磨いてくださいよ。今日は午後には左海の商人と謁見する予定がありますからね。早く準備しなくてははるばる西の海を渡ってあなたの顔を拝みにきた方々を待たせることになります」

養育係は少女が掴んでいる掛け布団をひきはがすと、本日予定を淡々と告げた。

はなはだ事務的で色気のかけらもないことこのうえない。

夢の中と現実とのあまりの落差に、少女はがっかりした。夜着一枚になった頼りない体を無意識に抱える。

「夢の中ではもっともっと優しくったのに」

不満げに唇をとがらせた。すると養育係は不思議そうに首を傾げた。

「何の話ですか？」

「……何でもないのじゃ」

この調子では夢の余韻にさえ浸らせてもらえなさそうである。

少女は寝台から渋々起き上がると、洗顔に向かった。面白くないとばかりに卓子の上に用意された盥に張つてある水をばしゃばしゃつと、いささか乱暴に寝起きの顔へかけた。

その間に養育係は静かに寝室から退出した。入れ替わるように、召し変えの準備で何人もの女官が少女を取り巻いていく。

こうして姫宮ののんびりしつつも忙しない一日が始まるのである。

余談であるが、この日女官の一人が少女の黒い艶やかな髪を結い上げていると、その白い首筋にそぐわない赤い斑点をいくつか発見したという。

ついでに女官は、美貌の僧侶とすれ違った際、今にもくくくと噴出しかけていた彼の姿を目撃していた。

だが賢明な彼女は、『もっと夢の中におりたかったのう』などと未練がましく呟いている幼い主を不憫に思い、あえて斑点については指摘せず、うまく髪飾りや化粧で隠すことにしたという。

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。もしよければ感想ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5670c/>

美しい国の姫

2011年1月27日13時37分発行